①

鎌倉では長谷の金波楼と云う、あまり立派でない海水旅館へ泊りました。それに就いて今から思うと可笑しな話があるのです。と云うのは、私のふところにはこの半期に貰ったボーナスが大部分残っていましたから、本来ならば何も二三日滞在するのに倹約する必要はなかったのです。それに私は、彼女と始めて泊りがけの旅に出ると云うことが愉快でなりませんでしたから、なるべくならばその印象を美しいものにするために、あまりケチケチした真似はしないで、宿屋なども一流の所へ行きたいと、最初はそんな考でいました。ところがいよいよと云う日になって、横須賀行の二等室へ乗り込んだ時から、私たちは一種の気後れに襲われたのです。なぜかと云って、その汽車の中には逗子や鎌倉へ出かける夫人や令嬢が沢山乗り合わしていて、ずらりときらびやかな列を作っていましたので、さてその中に割り込んで見ると、私はとにかく、ナオミの身なりがいかにも見すぼらしく思えたものでした。

勿論夏のことですから、その夫人達や令嬢達もそうゴテゴテと着飾っていた筈はありませんが、こうして彼等とナオミとを比べて見ると、社会の上層に生れた者とそうでない者との間には、争われない品格の相違があるような気がしたのです。ナオミもカフエエにいた頃とは別人のようになりはしたものの、氏や育ちの悪いものは矢張どうしても駄目なのじゃないかと、私もそう思い、彼女自身も一層強くそれを感じたに違いありません。そしていつもは彼女をハイカラに見せたところの、あのモスリンの葡萄の模様の単衣物が、まあその時はどんなに情なく見えたことでしょう。並居る婦人達の中にはあっさりとした浴衣がけの人もいましたけれど、指に宝石を光らしているとか、持ち物に贅を凝らしているとか、何かしら彼等の富貴を物語るものが示されているのに、ナオミの手にはその滑かな皮膚より外に、何一つとして誇るに足るものは輝いていなかったのです。私は今でもナオミが極まり悪そうに自分のパラソルを袂の蔭へ隠したことを覚えています。それもその筈で、そのパラソルは新調のものではありましたが、誰の目にも七八円の安物としか思われないような品でしたから。

で、私たちは三橋にしようか、思い切って海浜ホテルへ泊ろうかなどと、そんな空想を描いていたに拘わらず、その家の前まで行って見ると、先ず門構えの厳めしいのに圧迫されて、長谷の通りを二度も三度も往ったり来たりした末に、とうとう土地では二流か三流の金波楼へ行くことになったのです。

谷崎潤一郎『痴人の愛』（1924～25）

②

る眼と分厚な唇に昂ぶったものが感じられ、六十歳を迎えた人とは思えない。大介を囲んで、総足田の訪問着やカクテル・ドレスをまとった妻や娘たち、ダークスーツを整えた息子たちが、新年三日目の晩餐をはじめている。テーブルの真ん中には、氷の上に的矢牡蠣を盛り上げたオードブル皿が置かれて、一族の長である万俵大介がオードブル用のフォークを取れば、一族の手が静かにフォークに延び、的矢牡蠣のみずみずしい肉を見事な三鱗きではずし取る。大介の手が止まれば、申し合せたようにそれに倣う。椅子の背後にたっている給仕たちは、話し声が聞き取れない範囲の距離を保ちつつ、注意深くテーブルの進行を見守り、フォークの手が止まると、手早くオードブルの皿をひき、スープ皿を整える。伊勢海老のクリーム・スープであったが、八人の手が一斉にスプーンを取った。テーブルと椅もとの間に拳大の間隔をおき、上半身をまっすぐ伸ばした姿勢で、すっとスープを舌の奥に流し込むように呑み、スープの音をたてない。

「マドモアゼル　コマン　トゥルヴェ　ヴ　ラ　スープ　ドジュルデュイ（いかがです、今日のスープの味は）？」

「セ　エクセラン　ムッシュ　サ　ム　フェ　ラプレ　パリ（美味しいです、ムッシュ、パリを思わせるお味ですわ）、まあ、いやだわ……、お父さま、今は日本のお正月ですのよ」

末席に坐っている末娘の三子が、淡いピンクのカクテル・ドレスの胸を若々しくふくらませ、関西訛りの標準語で甘ったれるように云った。

万俵家では、一族が揃った晩餐の席では、今夜はフランス語、明晩は英語の会話でというのが、一種の習慣のようになっていた。

山崎豊子『華麗なる一族』（1970～73）

③

「東京のお姉さまに、銀平兄さまのこと、お話しになりましたのん？」
「うむ、大阪重工の安田さんのお嬢さんの方にきめたことを云うと、お前たちと同窓だし、気心が知れて、いろんな意味で好都合ですねと云っていたよ」
「そうなの、安田万樹子さんは、私と同じ英文科だったから、よく存じ上げているわ、大へんなスキーヤーで、学生時代から冬休みには、フランスのモンブランへ滑りに出かけたりする方やから、よく目だったわ」
　二子が云うと、三子も、
「そうね、美人やけど、少しばかりお派手なようやわね」
　相槌を打ちかけると、相子があとの言葉を遮った。
「でも、見目はどではございませんのよ、お仲人の芦屋の伊東さまのお話でも、万樹子さまは一見、お派手に見えるけれど、何といっても、母方のお実家が大阪の旧家のご一族だけに、あれでなかなか昔風の地道なお考えも持っていらっしゃると云っておられましたわ、それに上流階級の婚姻に必要な五つの条件のどれ一つとして欠けていらっしゃいませんわ」
「まあ、五つの条件ってなあに？」
　三子は、好奇心に溢れた声で聞いた。
「そう、この際、三子さんたちにも覚えておいて戴かなくては――、それは、家柄、係累、資産、父親の履歴と社会的地位、本人の履歴の五つです、安田さまの場合は、三代に遡ってごりっぱなご係累ばかりで、大阪重工の規模と業容については、誰よりも阪神銀行の頭取でいらっしゃるお父さまがご存知ですから、問題ないわけ――！」

山崎豊子『華麗なる一族』（1970～73）

④

　相子はコーヒーを飲みながら、これから訪ねる伊東夫人のことを考えた。大阪の大手商社の一つである伊東商事の会長夫人であったが、船場の旧家の出で、今なお御寮人然とした生活をし、阪神間の上流家庭の中で、船場の旧家出身の夫人を集めて『御寮人会』をつくり、いわゆる芦屋マダムといわれる社長夫人たちの『芦屋会』とは対照的であった。伊東夫人に云わせると、「芦屋会など、いくら大企業でも、所詮はサラリーマン社長夫人の集まりでおます、それに比べますと、こちらは、自前会社の社長、会長夫人で、由緒正しい船場出身の御寮人さんたちの集まりでおます」と云うことになり、『芦屋会』の夫人たちにいわせれば、「今頃、御寮人会などとは、古ぼけた大時代感覚もいいところでございますわ、自前社長とおっしゃいますが、それもせいぜいここ二、三年で、実力のある経営者と交替しなければなりませんわ」と云うことになり、それぞれ反目し合っているが、関西の上流階級の夫人たちの会は何といっても、この二つによって占められ、結婚適齢期の娘や息子を持っている母親たちは、どちらの会ともうまくやって行かなければならない。今度の万俵家と安田家との縁談は、大阪重工の安田社長がオーナーでこそなかったが、夫人が、船場の旧家の出であるということから、伊東夫人の橋渡しで、万俵家との縁談が始まったのだった。

山崎豊子『華麗なる一族』（1970～73）

いい加減な人ほど英語ができる

堀江珠喜

2009年10月6日　初版第1刷発行

第二章　動機は不純でいい

ちなみに私たちが英文科に入るや、渡された *Our College* という教科書には、卒業生についてこんな一節がある――Many have been wives of men in high positions in government or business, at home and abroad;……（国内外で、多くの卒業生は、官・民の要人の妻となり……）――男女雇用機会均等法のなかった時代のお嬢様学校では、これこそが教育方針であり、また多くの学生の目的だった。そして私もまた、セレブの奥様を夢見る一人であり、そのためには英文科卒であっても、フランス語を少しは話せるようにしておかねば、と考えたのだ。

なにしろ万俵家では、「一族が揃った晩餐の席では、今夜はフランス語、明晩は英語の会

⑤

大阪ロイヤル・ホテルの十五階にあるロイヤル・トップのステージでは、ジュリエット・グレコの『シャンソンの夕』が開かれていた。

ステージを囲む三十近いテーブルに、ダークスーツを着た男性やカクテル・ドレスを着飾った女性たちが席を占めていた。万俟銀平と安田万樹子もステージに近い席を占め、カクテルを飲みながら、本場のシャンソンに聴き入っていた。

ステージでは第一部が終り、第二部に入って、『愛の讃歌』が唄い出された。二色のライトが交錯する中で、真っ黒に光るドレスをまとったグレコは、栗色の長い髪を肩まで垂らし、マイクを胸に抱くようにして唄っている。

「いいわね、まるでパリのナイト・クラブにいるみたい」

万樹子は、カクテル・グラスに口をつけながら、そっと銀平の肩へ体を寄せるようにして囁きかけた。見合いをしてから一カ月経っていたが、万樹子とデートするのは、今日で二度目だった。万樹子からは三日にあげず、電話がかかって来ていたが、銀平は仕事の多忙を口実に避けていた。別に万樹子を嫌っているわけではないが、目だちすぎるほど派手な服装をした万樹子と並んで歩くことがやりきれないのだった。今夜も、銀ラメのリボンレースのカクテル・ドレスに、銀色の靴を履いた万樹子の姿は、人目にたち過ぎ、香水も二十三歳の未婚の女性にしては濃厚であり過ぎた。

ステージに眼を向けると、グレコの歌はブルーのスポット・ライトの中で、『枯葉』に変った。憂せぎすで知的な容姿であったが、心で唄うその声は、聴く者の心を深く包んで酔わせる。銀平はふと、まだパリにいるだろう小森章子のことを思い出した。まる三年、体の交渉を待ちながら、一言も結婚を口にせず、最後に「パリで以前の自分を取り戻して来るわ」と云い、絵の勉強に渡仏してしまった小森章子のことを思うと、銀平は結婚そのものが面倒であったことと、さほど大きくない灘の酒造家の娘と結婚に漕ぎつけることとの煩わしさから、そのまま別れたとはいえ、今、安田万樹子との結婚を目前にし、苦渋に似た思いが横切った。

スポット・ライトがステージの上のグレコの姿を消し、激しい拍手の中で、『シャンソンの夕』は終った。テーブルを埋めた人々は、口々にグレコの唄を讃えながら席をたった。

「万樹子さん、ご機嫌よう――」

華やかな声がし、若い女性が万樹子のそばへ近寄って来たが、銀平の姿に気付いて、

「あら、ご免なさい、お邪魔して――」

「いいのよ、ご紹介致しますわ、私の婚約者の万俟銀平さんですの、こちらは女学院時代の同窓生の吉野春子さん――」

万樹子は双方を紹介した。

「はじめまして、万樹子さんのスキー仲間の悪友なんですの、でもご結婚遊ばしても、どうぞ悪友をお見捨てなく――」

背の高い女性は、快活に笑った。

「万俟です、よろしく」

銀平は、無愛想にそれだけ云うと、女たちのお喋りにつき合わされるのを避けるように、さっさと階下の駐車場へ降りて行った。

山崎豊子『華麗なる一族』（1970～73）

⑥

「二子さん！　二子さん！」

万樹子は、犬を叱責する意味合いも含めて、テラスから二階の二子の部屋を見上げて呼んだが、一向に返事がない。しかし、窓が開いているからもう一度、声を上げて呼ぶと、庭掃除をしていたらしいお手伝いが走り寄り、

「若奥さま、二子お嬢さまは朝から、フランス語とピアノのお稽古でお出かけですけれど」

山崎豊子『華麗なる一族』（1970～73）

⑦

堅苦しい挨拶が終るのを待ち受けていたように、三子が、

「まあ、万樹子お嬢さまのツーピースはすてきね、お正月三日間はどんなのをお召しになるの、スーツケースを三つもお車に積み込んでいらしたんですってね」

と云うと、派手好きな万樹子は忽ち、顔を輝かせた。

「元日の朝は、真っ白なシホンベルベットのドレス、夜は疋田の訪問着、二日は、ほら、あなたと一緒に行ったジバンシイのファッション・ショーで買ったフォーマル・スーツ、そして――」

と並べたてたが、相子と視線が合うと、

「でも、私はこちらに嫁いではじめてのお正月ですから、お姑さま方のお召物とお合わせするつもりですわ」

山崎豊子『華麗なる一族』（1970～73）

⑧

麹町にある阪神銀行の行邸の居間で、美馬中は、二子と喋っていた。二子は今夜、上野の文化会館で開かれたルービンシュタインのリサイタルを聴くために上京して来たのだった。行邸といっても名目だけで、実際は戦前から東京の万葉邸としてあった建物であるから、来客用の広い応接室を除くと、あとは気楽な部屋ばかりだった。

美馬は、演奏会の模様を聞き終ると、

「ほう、関西でのプログラムに入っていない曲目を聴きに出かけて来たってわけ――、ピアノのお稽古も大へんだな、だけど、明日、うちでもう一泊して帰ればいいじゃない？」

「ところが、明日は女学院の同窓会があるから、八時の新幹線で帰らなきゃならないの、だから東京駅に近いこちらで泊るのよ」

と云うと、美馬は姿勢をかえ、

「二子ちゃんも、こうして見ると、なかなかの美人だな、グラマーだし、若さでピチピチしてるじゃないか」

よく伸びきった二十四歳の肢体を鑑賞するように眺めた。

「お姉さまの方が、ずっと美人よ、私と違って、お母さま似で、お品があって、日本風のほんとうにおきれいなお顔だち、その点、私や三子は、地主出身の父方の血が濃くて、いささか土臭い方ね」

父親似の目鼻だちのはっきりした顔で、笑った。

「いや、官僚の女房には、その方が有難いよ、何しろ、あの人と来たら、何事につけても浮世離れした悠長さだから、生活のテンポが合わなくてねえ」

美馬は、妻の一子のことを〝あの人〟と呼び、話題を変えた。

「どうだい、二子ちゃん、この間の細川青年の印象は？」

正月の志摩観光ホテルで偶然、出会った振りをして見合いの下見をさせた佐橋縫理夫人の甥にあたる細川一也のことを云った。

・・・・・

「細川君と近々、会ってみない？　彼、ピアノを弾くらしい――」

と云いかけた時、表門から玄関の車寄せに入って来る車の音がし、大介を出迎える書生や管理人たちの慌しい足音がした。

「やあ、中君、来てくれたのかい」

大介は、すぐ居間へ入って来た。

「ええ、今夜は新橋で宴席があったものですから、ちょっとお寄りして、お待ちしながら、二子ちゃんに、細川青年の件を口説いていたところなんですよ」

「あれは、結構な話だ、この辺で身を固めて貰いたいと思っている矢先だから、相手の都合さえつけば、明日でも中君と一緒に、夕食でもどうかね」

大介は乗り気で、顔を綻ばせたが、二子は、

「あら、困るわ、私にはそんな気持、全然なくってよ、それに明日は、女学院の同窓会があるから駄目よ」

と云うなり、さっさと部屋を出て行った。

「いかがでした？　春田構想なるものは――、私が橋渡ししたことだけに、どんな風な話になったか、気になっていたのです」

山崎豊子『華麗なる一族』（1970～73）

⑨

ゴルフ・ネットの標的の真ん中にボールが命中し、万樹子は得意気に二子を振り返った。

「二子さん、ちょっとした腕前でしょ」

「ええ、お始めになってどのくらいなの？」

「半月そこそこってところかしら、近くに打ち放しの練習場があるので、目下はそこのコーチについて基本的な打ち方のレッスンを受けているんだけど、練習場や家のインドアは早く卒業して、コースに出たいわ」

万樹子はそう云い、キュロット・スカートの裾を翻して、再びボールを打った。中心の的からはずれるボールもあるが、多くはクラブの真芯に当り、ぱしっ、ぱしっと標的の布を鳴らす音が、安田家の広い芝生の庭に響き渡る。

山崎豊子『華麗なる一族』（1970～73）

⑩

淳子の実家の田代家は旧幕時代から神戸で指折りの大地主だった。芦屋に住むようになったのは淳子が生まれる少しまえ、兵庫の旧宅が道路拡張で取りはらわれることになったからである。彼女の母は家付きの一人娘であった。この母は終戦後まもなく不幸な死をとげた。

ちょうどいまから十年まえ、淳子はK女学院の専門部に在学中、良策にたって、と望まれて、二十歳で学校を中途退学して結婚した。彼女は良策の顔は見知っていたが、彼にたいしては知人以上のどのような感情も持ちあわせてはいなかった。結婚後は、先代が良策の学生時代に建てておいてくれたこの自由ヶ丘の屋敷に移り住んだ。どちらに原因があったのか、十年たっても二人には子供がなかった。だが、良策はいまでも有名な愛妻家でとおっていた。

武田繁太郎『自由ヶ丘夫人』（1960）

⑪

別宮夫人が役員席になに食わぬ顔で戻ると、校村夫人たち一団の夫人連の話題は、ダンスそのものよりも、池上夫人が今夜出席するかどうかにかけられていた。

この話題はにぎやかな談笑の表にはでなかったけれど、底流のように夫人連の間に渦巻いた。

『まさかね、いくらなんでも――』

そんな声があちこちでささやかれ、賭けは圧倒的に夫人の欠席に集まった。

だが、そのときである。ふいにホールの入口辺にたむろしていた夫人連のなかから、かすかなざわめきが起こった。そのざわめきはたちまち広間中にひろがった。

役員席にひかえていた矢島夫人が、弾かれたようにたちあがった。

「まア、いらっしたわよ！」

声をおし殺したその叫びに、グループの夫人連の視線がいっせいに鋭い矢のように入口に放たれた。

たしかに、それは池上淳子だった。クリーム地の、裾に大輪の真紅の薔薇を散らせた華麗な訪問着でその豊かなからだを飾った彼女は、以前の彼女とみじんも変わらぬあでやかな微笑みをたたえながら、ゆったりとした足どりでホールへはいってきた。

期せずしてホールの視線は彼女に集中した。だが、彼女の表情にはいささかも應するところがなかった。彼女はこの夜のパーティーの主賓ででもあるかのように、周囲の見知った顔ににこやかに会釈した。その態度は立派だった。見事だった。そのとき、パーティーの開幕を告げる華やかなバンドの音が響きわたった。

武田繁太郎『自由ヶ丘夫人』（1960）

⑫

レコードが回轉を始めた。五月の光りは部屋に溢れ、音樂は悲しいほど透きとほつて流れた。登枝は、近ごろおぼえたりヴァース・ウェーヴの踏み方を、うつとり足さきに幻想しながら、（バザーも好いがお母さんのお伴ちやアね。折角の日曜だから、ホールに連れてつてくれるやうな人はないか知ら）と考へた。そこへ、

「お嬢さま、佐伯さんのお嬢さんがいらつしやいました」

清やが知らせたのである。「まア、ほんと？」と玄關に走り出ると、佐伯蘭子はもう靴をぬいでて、いきなり登枝に飛び付き、「スロオ・トロットね」と手を組んだ。二人はそのまゝ廊下を、さうして組んだまゝ踊る形で、食堂に入つて行つた。

「好いところへ來てくれたね。うち、女學院のバザーに行かうとしてたところやわ」

「そんなら、ちつとも好いところやあらへん。誰か一緒に行く約束した人があるのんやろ？」

「そらあるわ」

片岡鉄兵『花嫁学校』（1934）

赤土の坂をまばらな人の列に交つて登つて行くと、林の間からクリーム色の洋館が現れて來た。もう一つ上のテラスまで來ると、そこに青空と講堂とを背景にして、慈善市の雜沓が展開された。

「まア、大變なものね」

蘭子も登校も顔を輝かした。廣い敷地にも、林間にも天幕を張つた擬擬店にも、美しい着物を着た人が溢れてゐるのである。

「アイスクリームでも飲みませうか」

しかし、アイスクリームの店は滿員で、空いた腰掛はなかつた。二人は雜沓する間を苦勞しながら、カルピスの天幕にやうやく席を見つけた。

「こんな學校で制服の處女時代を送る人が羨ましいわね。ほんとに青春らしい青春つて感じがして……」

「わたしたちは損だつたわねえ」

登校や蘭子は今年大阪の女學校を卒業した。彼女らの學校の埃々した校舍に比べると、郊外の丘の、青空と植物の中に建つた校舍は、學校といふよりもむしろ愛と情操の聖舍のやうに思はれる。そこでは修身や育兒や進物の水引の結び方やの代りに、詩と音樂と花とがあるのだらう。一切がロマンチックで、快適で、人々は、あの明るい線とエレヴェションを持つた建物の中で、人間の魂の美しさ、愛情の悲しさなどについて、次ぎから次ぎに新しい講義をきゝ、鄙會のガソリンだらけな空氣の中で、雜巾でも洗濯するやうにガミガミ教育されてゐる女學生たちを哀れがつてゐるのだらう！

さういふ風に勝手な空想に耽つてゐると、登校は次第に自分がみじめになつて來るので、

「行かう」と蘭子を促しながら立ち上つた。

「ちよつと。わたしの知つた人が來てゐる」と蘭子も立ち上り、草を踏んで廣場に飛び出した。その蘭子を群衆の中に見失ふまいとして、登校は茫然に突き當つたり、人のパラソルを肩で擦いたりしながら、追つて行つた。

「小山さん！」

蘭子に呼び掛けられて一人の學生が振り返つた。學生と蘭子が躍いだ聲で何か話し合つてゐる間を登校は手持ち無沙汰な眼を群衆の上にぼんやりさらしてゐた。その邊には手藝品や、竹細工や、キャンデーや化粧品などの露店がならび專門部の女學生らしいのが、洋服に白い前掛をあてゝ店番をしてゐた。一つの露店は、古い卒業生の受持ちだらう、「有閑マダム」型に黑い羽織を着た奥さんが、店を前にして、おほつぴらに群衆の方に向いたまゝ、コムパクトを覗んで頬を引伸ばしながら顔をなほしてゐた。

「ずゐぶん變の多い顔だ、うちのお母さんと同期位か知ら」

登校がぼんやりその方を眺めてゐると、蘭子が肩を叩いていつた。

「紹介したげるわよ、野井登校さん」

背のたかい學生の、淺黑い笑つた顔が登校の眼の前で揺れた。

「小山です」

露店の前を通り抜けると、まつすぐに寄宿舍の方に行く通路に沿つて、廣々とした芝生が湖のやうに展けてゐた。

「蘭子さん、紅茶でも飲まない。あそこが喫茶店らしい」

學生は右手の溪をさした。樹々の緑の邊淡に、ところ〴〵山つゝじの花を浮き出させた淺い溪の斜面に、澤山のテーブルが置かれて、客の間を、女學生たちが茶と菓子をサーヴィスしてゐるのが、混雜の底にひつそりと見おろされた。

片岡鉄兵『花嫁学校』（1934）